

女子高生・車座フォーラム 2011 「京都大学を知ろう 研究者と語ろう」

11月6日(日)、女子高生・車座フォーラム 2011 を開催しました。本事業は、女性研究者支援センターの社会(旧:地域)連携事業ワーキンググループが中心となって企画を行ない、平成 18 年度から開始されました。

6 回目を迎える今年度は、渉外部と連携し、京都府下だけでなく近畿一円を含めた広範な地域の高校生と保護者の参加を呼び掛け、例年より規模を拡大して実施しました。

「京都大学を知ろう 研究者と語ろう」というテーマ

のもと、大学での勉強や研究、卒業後の進路、研究者や科学者の仕事を知ってもらうために、本学の理事・教員 35 名が講演者・講師をつとめました。高校生 61 名、保護者 22 名の参加があり、松本 紘総長も 8 つのグループ討論会場を訪れて励ましのメッセージを送りました。

午前には全体会、午後にはグループ討論会・全体会を行う 7 時間にわたる中味の濃い内容でしたが、全ての高校生が朝 10 時から夕方 5 時まで全プログラムに参加しました。



◆◆◆プログラム◆◆◆

10:00 ~ 10:15	京都大学百周年時計台記念館・2 階国際交流ホール前 集合・受付
10:15 ~ 10:20	開会の挨拶(女性研究者支援センター長 稲葉 カヨ)
10:20 ~ 10:40	京都大学の歴史(大学文書館・准教授 西山 伸)
10:40 ~ 11:00	京都大学の教育と現状(教育担当理事・副学長 淡路 敏之)
11:00 ~ 11:35	講師・研究分野紹介
11:35 ~ 11:45	グループ討論用の質問用紙記入
11:45 ~ 13:00	昼休憩
	【参加者】 13:00 ~ 14:45 グループ討論会場に集合・討論
	【保護者】 13:00 ~ 14:45 キャンパスツアー及び、西園寺公望京都別邸「清風荘」にてお茶会
14:45 ~ 15:15	全体会用の質問用紙記入・全体会会場に移動・休憩
15:15 ~ 16:25	全体での話し合い
16:25 ~ 16:30	閉会の辞(社会連携事業 WG 主査 教育学研究科・教授 鈴木 晶子)
16:30 ~ 17:00	アンケート記入・回収
17:00	解散

午前の全体会では、鈴木 晶子・京都大学女性研究者支援センター社会連携事業WG主査による司会進行のもの



と、稲葉 カヨ・京都大学女性研究者支援センター長より、開会の挨拶がありました。はじめに、西山 伸・京都大学大学文書館准教授より「京都大学の歴史」について講演がありました。自由と責任を重視する京都大学の校風、戦後初の女子学生の入学などについて史料に基づいてお話がありました。次に、淡路 敏之・京都大学理事・副学長より「京都大学の教育と現状」について講演が行われました。本学の最先端の研究や海外拠点、ポケットゼミや国際交流科目などの教育活動について、パワーポイントスライドを用いて詳細な説明がありました。「京大に入学し、ぜひ京大を使い回せる学生になってほしい」とのメッセージが送られました。



講演に続いて、講師と学生スタッフが一人ずつ自己紹介を行いました。

◆グループと講師（※は、学生スタッフ）

グループ 1

伊藤 公雄	文学研究科
内田 賢徳	人間・環境学研究科
氣多 雅子	文学研究科
※中野 苑香	総合人間学部 4 回生

グループ 2

伊藤 正子	アジア・アフリカ地域研究研究科
梶原 三恵子	人文科学研究科
阪上 優	国際交流推進機構
鈴木 晶子	教育学研究科
※井上 史嵐	経済学部 1 回生

グループ 3

押川 文子	地域研究統合情報センター
小畑 史子	地球環境学堂
木下 彩栄	医学研究科
齊藤 真紀	法学研究科
※十川 結衣	法学部 1 回生

グループ 4

池田 華子	医学部附属病院
片岡 正子	医学部附属病院
久家 慶子	理学研究科
三輪 哲二	理学研究科
※西尾 周朗	医学部 1 回生

グループ 5

見学 美根子	物質・細胞統合システム拠点
田浦 晶子	医学部附属病院
内藤 裕子	生命科学研究科
藤井 紀子	原子炉実験所
※藤田 一晃	医学部 1 回生

グループ 6

阿部 恵	医学部附属病院
稲葉 カヨ	生命科学研究科
今西 未来	化学研究所
高橋 淳	iPS 細胞研究所
※野田 弘陽	薬学部 1 回生

グループ 7

金子 めぐみ	情報学研究科
神吉 紀世子	工学研究科
杉山 淳司	生存圏研究所
山田 真澄	防災研究所
※今西 良太	工学部 1 回生

グループ 8

遠藤 隆	農学研究科
豊島 文子	ウイルス研究所
本城 咲季子	生命科学研究科
※香月 和敬	農学部 2 回生

事務局（学生スタッフ）

左海 陽子（文学研究科大学院生）

本塚 智貴（工学研究科大学院生）



昼食後、高校生はグループ討論会場に移動し、8グループに分かれて討論を行いました。松本 紘・京都大学総長も全グループ会場を訪れ激励のメッセージを送りました。



グループ1は、文系を志望する生徒が集まりました。自己紹介の後、多くの高校生が疑問に思っていた「文系の研究とはどういうものなのか」というテーマから議論を進めました。文系の研究は論文や文献を読み、それらに対して自分なりの解釈をつけ、新しい問題意識を発見することではないか、という意見が講師から出されました。また「誰かの真似ではない、自分なりの研究方法を見つけることも、文系の研究なのかもしれない」という発言もありました。次に講師の専門分野に関して、宗教や神、8世紀頃の日本人の生活、現代社会学の研究対象であるマンガやアニメについても話し合いました。高校生が自発的に手を挙げて質問をする場面も多く見られ、和やかな雰囲気での会話が進められました。



グループ2には、文系、文理融合系の生徒が集まりました。自己紹介の後、まず高校生から「研究を始めたきっかけは何ですか」という質問がありました。これに対して「新聞記者を3年つとめたが『継続して何かに打ち込む』ことができなかったため、大学院に入り研究者になった」「大学教員だった父親の研究者としてのライフスタイルに憧れて研究者となった」「組織の歯車としてではなく、一人の個人として仕事がしたくて研究者となった」など、さまざまな回答が寄せられました。「研究者になるためにはまず何をすることが必要か」という質問には、研究職に就職するまでどのくらいの費用がかかるか、また「食いはぐれた際のリスクヘッジを考えておくとよい」といった率直で具体的な回答もありました。

グループ3には法学や社会学分野に興味を持つ生徒が多く集まりました。まず、法律の勉強はどのように役に立つのかという質問がありました。これについては「法とは社会に張り巡らされた網の目のようなものでそれを勉強することで自信を持って世の中をわたっていくことができる」という回答がありました。文系・理系の選択については、理系の中にも社会学的な研究がある一方、文系の中でも分野ごとの境界は曖昧であり、まず現場を知りそこで見つけた問題を解決しようとする姿勢が重要で

あるという回答がありました。「将来人の役に立ちたい」と考えている高校生が多く、講師からは「気持ちだけでなく専門分野の知識を身に付け、自分はこの分野なら勝負できるというものを見つけないと本当に人の役に立つことはできない」というアドバイスがありました。

グループ4には、理学分野に興味をもつ生徒が集まりました。ES細胞の倫理的問題、専攻分野を選んだきっかけ、最近どのような一日を送っているのか、などの話題が出ました。「研究者は研究室にひとり籠って朝から晩まで研究に邁進している」というイメージがあるという高校生のコメントに対しては、実際は逆で人との共同研究が多く、コミュニケーション能力が想像以上に必要である、との回答が寄せられました。そして、留学は語学力を上げ、新しい知見・視点を得るだけではなく、人の輪を増やすという観点からも重要であるとの助言がありました。「生命科学を専攻するにあたって理学部・農学部・医学部の違いは何なのか」「数学が得意になるにはどうすればよいのか」「文理選択はどのようにすればよいのか」といった進学に関する具体的な質問も多く出ました。講師の側からは、高校生に車座フォーラムに来たきっかけや目的について質問がありました。

グループ5には、医学に興味をもつ高校生が参加しました。「研究者になろうと思ったきっかけ」については、「研究の楽しさ、感動が根底にあった」「臨床の現場で限界を感じた」など様々な回答がありました。「女性研究者の生活はどのようなものか」「恋愛、出産、育児等、両立できるか」という問いに対しては、「両立はできるが、時間、金を捻出するために苦労が必要かもしれない」「研究を遅らせるわけにも、子育てをしないというわけにも行かないので、実験等を同僚に依頼したり、時間をお金で買った」といった経験談も披露されました。また、出産、子育てについて祖父母の協力や行政の支援策をしっかりと利用することが大切だという助言もありました。「素敵な男性と出会うチャンスは？」という質問に対しては「京都大学で研究していれば、おそらく大丈夫だろう」という回答もありました。

グループ6には、生命科学、薬学分野に興味をもつ生徒が集まりました。はじめに研究者のライフスタイルについて話し合いました。「妊娠出産後も研究を続けることはできるか」「研究だけで生計を立てていくことができるか」「どのような経緯で京都大学に来たのか」といった質問が出ました。研究とそれ以外の日常生活との時間配分に関する質問については、講師から「日常生活でも

どこか頭の片隅に研究のことが常に潜んでいるので 24 時間研究について考えている」、「研究と子育ての両立には一定の覚悟も必要」という回答がありました。講師の研究分野についての質問も多く、レプチン、ES 細胞の倫理的問題、脳の差異による男女の行動差、地球温暖化に伴う感染症の拡大への対処、大学院生活、留学のメリットなどについても話し合いました。

グループ 7 には、理工系分野に興味を持つ高校生が集まりました。研究者となったきっかけについては「自分のやりたい事とことのできることが、企業勤めと異なる」「未知のことを自分が解き明かすのが楽しい」「自分の研究が世界で認められた瞬間、これいけるんじゃないと思った」「自由な環境でアクティブに動くことができる」といった回答が寄せられました。「研究者は辛くないか。研究のスタンスは？」という質問については「辛いです。また給料も・・・」しかし壁にぶち当たった時、別のものを見たりすることで対象が違った角度から見えてくるもので、それが楽しい」「研究には自分の専門分野は存在するが、進めていくうちに研究範囲が広がる。研究には多面的な視点とピンポイントな深い知識が必要である」という回答がありました。理系志望で数学が苦手な生徒に対しては「得手不得手は入学してから変わるものだから問題ない」「進む道によっては数学をツールとしてしか使わなくなったりする」というアドバイスがありました。

グループ 8 には農学分野に興味をもつ生徒が集まりました。研究者としての講師の経験に関する質問が多く、「論文に自分の名前が載り、自分の机から発信された研究成果が世界で信じられているのだと感じられる喜び」「学会で様々な人と友達になったり、世界や日本の各地を回ることなども研究者ならではの経験」という回答がありました。具体的な進路や大学受験に関しての質問もありました。講師からは「学部に入學してから自分の理想と興味の間にギャップを感じた」「自分の学部が性に合っているかよく分からず、別の学部の講義も並行して受けに行った」「必ずしも自分の希望の分野に進めたわけではなかった」などの体験談が語られました。そして大学に入ってから分野を少しずつ変更していくことも可能であり、具体的な進路は後から決めてもよいのではないか、ただし英語や化学の勉強はしておいたほうがいい、というアドバイスがありました。松本総長も、農学部が様々な領域の問題を扱っていることについて紹介されるなど活気ある意見交換が行われました。



高校生がグループ討論を行っている間、保護者は竹沢泰子理事補とともにキャンパスツアーに参加し、西園寺公望京都別邸「清風荘」にて、学生サークル「心茶会」によるお茶会も楽しみました。

グループ討論の後には、もう一度全員が集まり、久家慶子・京都大学女性研究者支援センター社会連携事業WG推進員の司会で、全体会を行いました。まず、アシスタントの学生より各グループの討論内容について発表を行い、講師が高校生からの質問に答える形でまとめを行いました。「将来、何になりたかったか」という質問が司会者より提出され、講師の意外な回答に笑いが起こりました。最後に、鈴木晶子・社会連携事業WG主査の閉会の辞にて、盛会のうちにフォーラムは終了しました。



Center for Women Researchers

〒 606-8303 京都市左京区吉田橘町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>